

## 知ることは問うこと



		<b>松江 正彦</b> 秋田県立横手高等学校定時制 国語科	
教科 総合的な学習の時間 7時間 国語総合 18時間	対象 2年次A組 20名・C組 18名 ※2011年度は1年次C組(20名)のみ対象		

### I 実践の目的

平成23年度 JICA 教師海外研修に応募した動機は、第一に教員としての視野を広げるため、第二に世界の中に存在している「自分」という意識を生徒に持たせるための具体的な知識と方法を獲得したいと考えたためでした。

そのように考えるようになったのは、高校の職員室で回覧されていた JICA の冊子によって「開発教育」という言葉に触れたことがきっかけでした。「開発教育」の内容の多彩さと国際問題の切実さに大変興味を持ちました。またこれまで自分が行ってきた授業や同僚の授業の中に「開発教育」に近いものがあることにも気づき、改めて学んでみたいと考えるようになりました。

昨年度から初めて定時制高校に所属することになり、一年半にわたる教育活動の中で強く感じることは、定時制高校の生徒は普通高校以上に授業の面白さに敏感で、厳しいということです。また、生徒たちの周囲には一過性の楽しさ・面白さは溢れていても、尾を引くような疑問や関心事、自らの生命や人生に関わる事象について触れる機会が不足しているのではないかと疑問でした。このような思いを抱きながら参加した教師海外研修で自分に課した課題は、知識と方法の獲得でした。具体的には、生徒たちが世界と自分たちの繋がりを実感できる場面に授業に取り入れるための知識と方法ということになります。その際に念頭にあったのは、作家・井上ひさしの

むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、そしてゆかいなことはあくまでゆかいにという言葉でした。

海外研修後の授業では、何よりも生徒たちの経験知をできるだけ増やすことを最優先に考えて指導に臨みました。生徒の前には既知よりも未知のものが遙かに多く存在しています。しかし多くの生徒はそのことに気付いていません。私が「高校生」の弱点だと感じるのは「経験」が少ないということです。様々な経験は未来を推測する力になっていき（時には推測したために諦めるということもありますが）、今後の人生で選択をする際の決断力へと繋がっていくはずですが、しかしながら本校の生徒たちを見ているとそのことに気付くことはなかなか難しい状況にあることが分かります。未知のものがあることや遠くに目標や目的があることが分かるのは、ある程度高いところに到達してみないことには見えてこないものだからです。好奇心があっても様々な事情でそれを行動に出しづらい事情を抱えた生徒たちをいかにして刺戟し、鼓舞するかという問いが常について回ります。

ここに掲載した実践は主に「国語総合」の授業で実施しました。大きなテーマとしては「推測」ということが挙げられます。教科書本文を中心としつつ、写真や戯曲、歌や落語といったものを教材として取り上げました。様々な視聴覚教材を集中して見聞きすることによって、描かれている世

界の「熱量」を感じ取らせたいと考えたためです。これらの教材に共通しているのは「他者」に何かしらを「伝えよう」としていることです。世の中の様々な事象から隣人の感情の機微まで、さまざまなものが生徒の周囲にはあります。それらを理解するためには何が必要なのか、また人は人と分かり合うことができるのか、といったことについても考えさせることを意図しました。

いずれは地域から秋田県、日本全体そして世界までを射程に入れ、世界の諸問題に対する問いの立て方、問いに対する多角的な視点による解決策の探り方、そして自分の考えや意見を相手にできるだけ正確に伝えるための表現力を身につけさせたいと考えています。

## II 授業の構成

年 月 日	活 動 内 容	活 動 の 目 標
2011年 11月15日(火)	「大人の学校－国際協力学入門－」 JICA 出前講座 (総合的な学習の時間・2時間) JICA 秋田デスク奈良保則氏	海外で勤労経験のある方の話を聞き、日本と世界のつながりの一つとして国際協力というものがあることを理解し、最終的には前向きに人生を考えるきっかけとする。
2011年 11月下旬～ 12月中旬	「インドネシアと国際協力」 (総合的な学習の時間・2時間)	授業者が今回海外研修参加に申し込んだ理由・動機について知ること、インドネシアにまつわる国際協力の形を知る。
2012年 1月下旬～ 2月下旬	「インドネシアを推測する」 (総合的な学習の時間・3時間)	インドネシアの写真や食べ物、音楽を聴くことで、授業者の実体験に触れ、インドネシアの現状とその課題を考える。
2012年 2月上旬～ 中旬	平成23年度 JICA 東北国際協力実 体験プログラム事前学習 (授業外 の活動として実施)	国際協力実体験プログラム参加生徒、引率教員とともに国際協力に関する問題提起を試みる。
2012年 4月中旬～ 5月下旬	「『赤鬼』 in 『爆弾のような問い』」 (国語総合・9時間)	異文化を理解することの困難さを、自分自身を理解することの困難さと比較して考え、自己存在の曖昧さについて考える。
2012年 5月下旬～ 6月下旬	「自己基準と他者基準」と落語の 世界観 (国語総合・9時間)	様々な「基準」はどのようにして出来るのか、という点について「言語」をキーワードにして考察する。
2012年 7月6日(金) (実施予定)	全年次 PTA 講演会 「東日本大震災－知る－」 宮城県気仙沼市立鹿折小学校 教諭・昆野光行氏	これまで教師海外研修に二度参加されている昆野光行先生の講演を聞くことで、東日本大震災の実体験について知り、さらには国際的な視野からも理解を深める。

海外研修前の実践は合計4時間を「総合的な学習の時間」として行った。

海外研修後の実践は全21時間で、そのうち3時間を「総合的な学習の時間」で実施し、18時間を「国語総合」の授業として行った。

21時間の内容の内訳としては視聴覚教材による授業を9時間、教科書本文を使った授業を12時間

とした。なお2012年7月6日（金）には、教師海外研修で私が属していた班のリーダーである昆野光行氏をお呼びして、全校PTAで「東日本大震災」をテーマにした講演を予定している。

### Ⅲ 授業の詳細

#### ①海外研修前の「総合的な学習の時間」における実践（2＋2時間）

##### JICA について知る

JICA 秋田デスクの奈良保則さんをゲストに招き「大人の学校」というタイトルで「国際協力」の基礎について2時間にわたってお話いただいた。具体的には奈良さんが働いていたナミビアというアフリカの国についての説明や海外での暮らしぶりについて教えていただいた。生徒の興味関心をひきつける講義内容で生徒たちはとても充実感を感じているようであった。

「大人の学校」の後日、JICA 教師海外研修に参加する目的とこれまでの事前研修の内容について生徒に伝え、インドネシアで見てきてほしいことを事前に話し合わせた。生徒たちがインドネシアはもちろん外国に関する知識がかなり少ないことが分かり、今後の授業実践のためのスタートラインがここで定まった。

#### ②海外研修後の「総合的な学習の時間」における実践（3時間）

本校の生徒の特徴としては、視覚的な刺戟に対する反応が鋭い反面じっくりと対象に向かうための集中力が乏しいこと、また経験知が少ないながらも好奇心が旺盛であることが挙げられる。このことから海外研修直後の学習は「総合的な学習の時間」を使って、視覚に訴える教材を多く設定し、「推測」をテーマにした。



写真①



写真②

授業では、まず何の情報も与えないまま写真①・②を見せることにした。

写真①が、電波を受信するためのアンテナであることはある程度の時間で推測できたが、なぜ真上の方向を向いているのかという点については、なかなか答えに至らなかった。地球儀を用いたことでいくらかイメージが湧いたようであった。付随して赤道直下の気候やインドネシアの生活様式について説明を加えた。

写真②はインドネシアの宗教について考えてもらうための一枚である。キリスト教に関してはいくらか知識はあっても、インドネシアの信仰の大多数派であるイスラム教についてはヒンズー

教との区別がついていなかったりする状況であった。コーランやモスク、アザーンについても触れる。この写真は津波七周年祈念イベントに参加した際のもので、真ん中でマイクを持っているのが若きカリスマ宗教指導者である。彼が祈念イベント会場に到着した際に、それまでのおおらかな雰囲気が一変して緊張感を帯びたことを伝え、インドネシアの人々にとって宗教というものがいかに重みを持ったものであるかという点について考えてもらった。同時に日本人の宗教観についても話し合うこともさせた。

写真③はバンダアチェ市内の ATM 前での撮影である。24時間体制で銃を所持しながら警備をしていることを伝えると生徒はとても驚いていた。生徒には実際のインドネシア硬貨と紙幣を見せることで貨幣システムについてイメージを膨らませてもらった。そのうえでなぜこのような警備が必要なのか、日本との治安の違い、その原因について話し合わせた。結果、国家としての安定感の違いや貧困問題が浮かび上がってきた。



写真③



写真④

写真④はバンダアチェのシロン集団墓地の風景である。ここは海外研修中に最も心を動かされた場所の一つで、この草地の下には津波の被害で亡くなった方の遺体が幾重にもなって埋まっているとのことであった。気候や宗教の影響で身元確認の取れていない遺体が相当数含まれていることを授業で伝えると、生徒たちはショックを受けていた。日本とインドネシアの死生観の違いや社会基盤について様々に考えを巡らせていた。



写真⑤



写真⑥

写真⑤はバンダアチェの市街地の風景を、移動するバスの中から撮影した一枚である。このよ

うな作りかけの建物が街のいたるところにあり、予算が尽きれば放置され、建設費の目処がたてば再び着工に取り掛かるとのことであった。この写真からはインドネシアという大きな国における「バンダアチェ」の位置づけや経済の状態を推測してもらった。

写真⑥は地域の防災モデル校であり、市内第一の進学校でもあるバンダアチェ第1高校で生徒と対話した際の一枚である。彼等が大人びた表情と落ち着いた口調で将来の希望を語ってくれたこと、そしてその姿に心を打たれたことを授業では強調した。

インドネシアの生徒たちに共通していたのは、インドネシア中央部の大学に行き、そこで学んだことをバンダアチェに戻って活かしたいという強い思いであった。同時に日本に対する憧れを持っているということであった。では、彼らにとっての「憧れの国」に住んでいる我々は、将来にどのような夢や希望をもっているのか、という点について授業の後半で話し合ってもらった。生徒たちは非常に複雑な思いを抱いたようであった。

## ②海外研修後の「国語総合」における実践（9＋9時間）

教科書の教材「爆弾のような問い」（鷲田清一）は人間のアイデンティティーの根拠の曖昧さを突いた刺戟の強い評論文で、非常に難解であった。そのため教科書本文を深く理解してもらうために野田秀樹の「赤鬼」という戯曲を使用することにした。この作品は、ある閉鎖された集団の中に「未知の言葉を話す異形の存在（＝鬼）」が投げ込まれたときに起こるドラマを描いている。そしてまさにこの内容は、異文化同士の交流・混流についての物語でもある。授業ではまず初めに実際に上演された作品のDVDを鑑賞し、以下の項目を記した授業プリントと戯曲の引用をもとにして実践を行った。

### 国語総合「爆弾のような問い」

「私」とは何か－彼岸と此岸－ テキスト：野田秀樹「赤鬼」

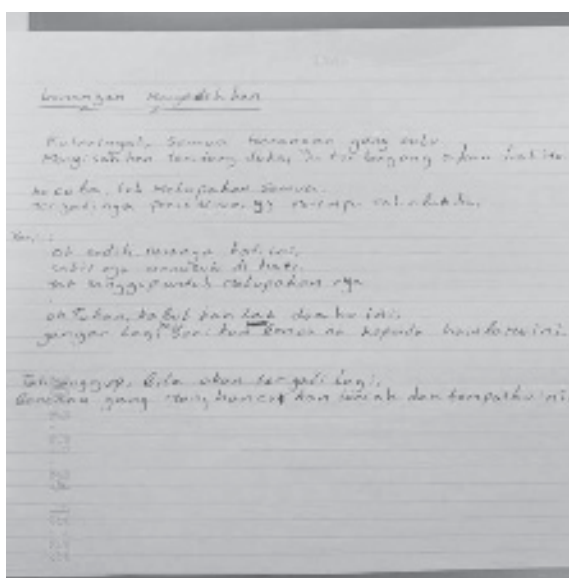
- ①映像作品『赤鬼に関して気になったこと・考えたことをできる限り書き出して下さい。  
単語でも箇条書きでもいいので、出来るだけ大きな事から細部にいたるまで
- ②人間にとって「鬼」とは何（者）だと思いますか？
- ③あなたは「他人」と「自分」を区別するために何を基準にしますか？
- ④「他人と出会う理想の状況」としてあなたが思い浮かべる内容を教えてください。

プリントにある問いの②は「言葉」の問題へと繋がっていき、戯曲の登場人物である「あの女」が「赤鬼」に伝える台詞の意味の考察へと繋がっていく。その台詞とは、

不思議よね。あなたのコトバ、全くでたらめにきこえてた頃、獣のうなりだと思っていた頃、あなたの言うことがとてもよくわかった。ところがこうして、その響きを越えてところどころ言ってることがわかってくと、あなたの言うことがわからなくなる。

（※傍線部は引用者による）

というものであるが、ここで「あの女」は言葉で理解できることの先に何かしらの「余地」が残されていることを感じる。と同時に、たとえ言葉が通じても相互理解しあうことの途方も無い困難さに気付いている。では「言葉」に頼れなくなったときに人はどのようにして「自分」という存在を保とうとするのか、という発問をして生徒に揺さぶりをかけた。



高等学校

もう一つアイデンティティーの問題を探るきっかけとして提示したのが「歌」である。

上の写真は訪問先で最も印象に残った Muhammad Muktamar 君, Age 16 (third grade) の歌の歌詞 (左図) とその歌を披露してくれた際の様子 (右図) である。

彼は SMP Negeri 11 Banda Aceh (Jl.Teuku Chik Cot Arun, Ds Lamjabat, Meuraxa Banda Aceh) に属しており, スマトラ島沖地震の津波で失った友に捧げる歌を披露してくれた。

この「歌」は教師海外研修中から実践に生かしたいと考えていた。最終的には「歌」が持っている機能を「個人の思いを普遍化し, 他者と共感を可能にする」と解釈し, 「アイデンティティー」の問題と関連させて扱うことにした。

以下の①はインドネシア語で歌詞を書き起こしたもの, ②は英訳, ③は日本語訳である。まず動画で彼の歌を聞かせてその内容を推測させ, ①~③の順にヒントを提示し, 歌に描かれている内容の理解を促していった。

<p>① kenangan menyedihkan                  ku teringat, semua kenangan yang dulu                  menyisahkan tentang duka,ku terbayang akan hal itu.                  kucoba tuk melupahkan semua                  terjadinya peristiwa yang menimpah sahabatku                  reff :                  oh sedih, rasanya hati ini.                  sakitnya menusuk dihati                  tak sanggup untuk melupahkannya                  oh tuhan kabulkanlah doaku ini                  jangan lagi kau berikan bencana kepada                  hambamu ini                  tak sanggup, bila akan terjadi lagi                  bencana yang menghancurkan daerah dan tempatku ini</p>	<p>② sad memory                  I remember all the previous memory                  About sadness, I came to think of it                  I try to forget all about the incident that                  happened to my friends                  ref :                  Oh its so sad, it feels in this heart                  the pain is like stabbing my heart                  I am not able to forget it                  Oh my Lord, please answer to my prayer                  Do not let this disaster happen again to your                  servant                  I will not be able to hold it, if it happen                  again The disaster that destroy my land and                  my place</p>
---	--

③ 悲しい思い出

思い出す、過去全ての思い出悲しい思い出を残させる、今でもその震災の出来事を思い出す、僕は仲間起きた出来事を懸命に忘れない。(繰り返し) ああ 心が悲しくなる心が針につき刺された様な感じ 忘れる事なんて出来無い。ああ 神様どうか僕の願いを叶えて下さい もう二度とあの様な震災の出来事を起こさせないで下さい 僕はまたあの様な震災の出来事が起きたら、どうすれば良いのか分からない あの震災の出来事は僕の地域や居場所を壊した。

これら①～③の情報をもとに推測していった歌の内容と実際の内容を比較した上で、仮に日本語訳を読んでも、果たしてその行為は「歌」を作った彼の喪失感を十全に理解したことになるのだろうか、という問いかけをしてこの単元を終えることにした。

次に取り上げた「自己基準と他者基準」(鈴木孝夫)は「言語」と「日本人のアイデンティティ」との関わりを扱った教材で、直前の実践との接続が非常にスムーズであった。

世界中の様々な言語を話す人々が、それぞれの国の風土や気候、生活スタイルや伝統そして「言語」によって数多くの「基準」を作り出しながら生きていることを論理的に説明し、日本人の特質として「劣等感」というキーワードを提示した評論文である。授業では、まず本文の読みを一通り終えた後に、以下の項目を記した授業プリントと落語「堀之内」をもとにして実践を行った。

授業プリント② 「ものさし」－風土・文化・そして言語－

テキスト：古今亭志ん朝「堀之内」

- ①落語『堀之内』を聴いてみて気になったこと・面白かったことをできる限り書き出して下さい。単語でも箇条書きでもいいのでたくさん。
- ②落語「堀之内」を聴いて想像したイメージを「絵」にしてみてください。
- ③あなたが自分を「日本人」だと感じる瞬間はどんな時ですか？ 具体的に書きなさい。
- ④「劣等感」を「力」に変えるためには、何が必要だと思いますか？

「堀之内」とは、ものすごく「粗忽(そこつ)」な亭主が神様への信心で「そそっかしい」のを直そうと、朝早く起きて、「堀之内(日圓山妙法寺、杉並区堀ノ内にある祖師堂で通称『おそしさま』)」に出かけるのだが、行って帰ってきてその後までの間にさんざん粗忽なことばかりを繰り返すという落語である。授業のポイントにしたのは生徒には馴染みの薄い「粗忽」という単語である。この一つの単語にまつわる雰囲気や行動の様子について考えさせた。

なおこの教材で目指したのは「現代の日本人」という概念を捉えることである。

日本の伝統芸能の一つである落語の中に描かれている、「江戸」の人々の吐く息と現代に生きる我々が吸う息は、どこかで繋がっているのかという点について考えてもらった。そしてあらためて日本人というものの在り方、その「基準」を捉えなおしてもらった。江戸時代の人間の営みを描いた物語を聴いて笑うという現象の根底には、江戸時代から現代までを貫いている様々な「基準」があるはずで、それが何かを考えてもらった。

プリントの問い①では、生徒の感想を発表させ、その中から共通した部分を抜き出した。その結果「おちょこちょい」であったり「間抜け」といったキーワードが見つかった。次に、気になる単語をメモさせながら再び落語を聴いてもらったところ、分からない単語・耳慣れておらず聞き取りづらい単語として「粗忽」が挙がった。辞典を使ってその意味を調べさせ、落語に描か

れた亭主の物語の中で「何がどうなっていたのか」を、②の問いで「絵」に描いてもらい、それらを比較した。

生徒たちは自分が最も印象に残った一場面を描いており、複数の場面を一つの絵にまとめた生徒は殆ど見受けられなかった。またそれぞれ異なる場面を選んでいても「粗忽」な様子を描いている点では共通しており、一つの言葉が持っている広がり（多様性）について理解を深めてもらった。

ここで教科書本文に戻り、「粗忽」であることは「劣等感」に結びつくのか、ということについて話し合った。既成の秩序を超えた行動を取る亭主に対して、ある種の痛快さを感じたり共感する生徒もあり、話し合いは活発に進めることができた。「劣等感」を植え付けるある種の制約や束縛が、時には新しい可能性を生み出すことを理解していた。

#### IV 実践の成果

海外研修前は「開発教育」の授業を行うには「総合的な学習の時間」以外は難しいのではないかという考えにとらわれていましたが、帰国して授業実践の案を探るうちに「国語」という教科の持つ広がりや視点の多様さについて思い当たることになりました。韻文と散文、詩や歌や俳句、小説や評論にエッセイ、手紙、論文といった「形式」、そしてそれらが捉えようとする対象は無限にある。これは国語の強みでもあります。

国語の授業では、教科書本文を常に念頭に置きながら、派生する諸問題へと話題を広げていくことができました。我々の前に立ち現れる話題や出来事は、ほとんどがその根底に国際問題への繋がりを見出すことができることを生徒は感じ取っていました。少なくとも話が「世界」に飛んだとしても、これまでのような抵抗感は感じられませんでした。

アイデンティティーや異文化、基準、言語といった問題は容易に理解・解決できるものではないでしょうし、解決することのない「問い」なのかもしれません。だからこそこれらの「問い」を問い続け、より深めていく行為こそが重要であることを繰り返し伝えることを意識しました。

#### V 課題

自分が理解していることと、それを授業で伝えることには常に大きな違いがあることは分かっていたのですが、新しい試みを行う際にはとりわけこのことを考えさせられました。それは「授業」の難しさを再認識することでもあり、かつ新鮮な経験でした。

本校では毎年秋に「生活体験作文」という催しがあり、生徒たちがこれまでの生き方について自己開示をする場になっています。例えば海外にいる場合、自分の考えを正確に相手に伝えることは「言語の違い」と相俟って困難になります。「生活体験作文」を伝える相手は殆どが同じ「日本語」を話します。しかし「言語」が同一であったとしても微妙な「表現の違い」によって一つの思いが多様な捉えられ方をすることがあります。このような視点を今後の授業実践では特に注目させるようにしていきたいと考えています。また秋田県の教育方針は、数年前から「キャリア教育」に重点的に力を入れています。本校の実情としては就職を希望する生徒が大多数を占めることもあり、生徒が社会とより深くコミットしていく力をつけるための指導の確立が喫緊の課題となっています。自分とは異なる「他者」を理解し、協調しながら仕事を



勤め上げていくためにはコミュニケーション能力が必要となります。その観点も今後の授業実践からは外せない要素です。

「開発教育」という視点を授業に取り入れることは、学校に新鮮な空気を取り入れ、風通しをよくすることにも繋がると私は考えています。現代に生きる者にとって「世界との距離の近さ」は不可避の課題といえます。たくさんの意見や考えの中から、自分が納得して能動的に「選択」していくためには情報を判断する力が必要となります。その力をつけるための方法として「開発教育」は意義のあるものだと考えています。広い視野から「見通し」を持って授業に臨むことが、これまで以上に教師に求められていると強く感じます。

### 関連する学習指導要領の内容と文言

#### 高等学校学習指導要領 第1節 国語 第1 国語総合

##### 2 内容 A 話すこと・聞くこと

(1) 次の事項について指導する。

ア 話題について様々な角度から検討して自分の考えをもち、根拠を明確にするなど論理の構成や展開を工夫して意見を述べること。

イ 目的や場に応じて、効果的に話したり的確に聞き取ったりすること。

ウ 課題を解決したり考えを深めたりするために、相手の立場や考えを尊重し、表現の仕方や進行の仕方などを工夫して話し合うこと。

エ 話したり聞いたり話し合ったりしたことの内容や表現の仕方について自己評価や相互評価を行い、自分の話し方や言葉遣いに役立てるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。

##### 3 内容の取扱い

(6) 教材については、次の事項に留意するものとする。

ア 教材は、話すこと・聞くこと的能力、書くこと的能力、読むこと的能力などを偏りなく養うことや読書に親しむ態度の育成をねらいとし、生徒の発達の段階に即して適切な話題や題材を精選して調和的に取り上げること。(～以下略)

(中 略)

ウ 教材は、次のような観点に配慮して取り上げること。

(ア) 言語文化に対する関心や理解を深め、国語を尊重する態度を育てるのに役立つこと。

(イ) 日常の言葉遣いなど言語生活に関心を持ち、伝え合う力を高めるのに役立つこと。

(ウ) 思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨くのに役立つこと。

(中 略)

(キ) 人間、社会、自然などに広く目を向け、考えを深めるのに役立つこと。

(ク) 我が国の伝統と文化に対する関心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。

(ケ) 広い視野から国際理解を深め、日本人としての自覚をもち、国際協調の精神を高めるのに役立つこと。

## ●出典・参考図書

- ・井上ひさし『演劇ノート』白水社 1997年7月25日発行
- ・鷺田清一「爆弾のような問い」『新編国語総合』東京書籍 平成23年2月10日発行
- ・鈴木孝夫「自己基準と他者基準」『新編国語総合』東京書籍 平成23年2月10日発行
- ・野田秀樹「赤鬼」（『解散後全劇作』所収）新潮社 1998年3月25日発行
- ・『高等学校学習指導要領』文部科学省 平成21年3月告示
- ・古今亭志ん朝「『堀の内』落語名人会（28）」ソニーレコード 1995年11月22日発行
- ・森博嗣『喜嶋先生の静かな生活』講談社 2010年10月25日発行